

じょうこうじ 掟光寺だより

令和5年
4月号

行事案内

●4月9日(日)
「宗祖報恩講」

13時30分から



ろくはらみつ
六波羅蜜(布施)

【水泡のはなかざり】

昔の天竺(今のインド)にある国がありました。王様には一人の王女がいて、王は非常に溺愛しており、王女の言うことであれば、どんな無理でも聞くというほどの可愛がりようでした。

い、今に殺されてしまいかと震え上がっていますと、その中の一人の老細工師が王の前にすすみ出て、「わたしがお請け致して華鬘を作ります」と言いました。

それを聞いて王は大変喜び、王女に向かい、「お前の望み通り、泡の華鬘を作ってくれるそうだから、姫も行って見ていなさい」と言われ、姫は王の言葉に随い、外に出て見ていますと、

その老細工師は姫に向かって、「わたしは老眼で泡の善し悪しを見分けることができませぬ。恐れ入りますが姫様ご自身のお手で泡を取って、わたくしにお渡し下さい」と言いました。

そこで姫は水溜まりまで行って自分で泡を見分けて、手に取ろうとしますが、手にするとすぐにこわれます。一生懸命になって手に取ろうとして、一日中それにかかりましたが、どうとう一つの泡も取り上げることができません。

そこで姫は疲れ果てて、泡を取るのを止めて、王に向かって、「泡は直に消えてしまつて、とてかつら髪を作ることはできません。わたしには萎んだり消えたりくれない金の鬘を作ってください」と言つた、というお話。

【解説】

このお話は、人の身も水の泡のようにならぬと消えるはかないものであるから、早く発心(思い立つこと)すべきであるとの喩え。

しかしながら、私たちはこの王女と同じように移り行く無常を理解することができません。理解するために何事も経験が大事です。王女がみずから泡を手にとろうとしたからこそ、泡で華鬘ができたことを覚えることができたわけで、誰でも実際に自分で経験しないことは、腹の底から納得することはできないというお話でもあります。

道歌にこんな歌があります。

聞く時は、誠と思う、法の道、その場をたてば、はや忘れけり

聞いている時はそうだなと思うが、しばらく立ってしまえば忘れてしまうということ。何回も聞いて何回も忘れて、ようやく頭に残ることで発心は生まれるものかもしれない。

